

司式:大谷昌恵
奏楽:山田絵里

前奏:「主イエス・キリストよ、み顔をわれらに向け」(J.S.バッハ)

招詞:あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。(使1:8)

讃美歌:2「聖なるみ神は」

交読詩編 73. 21-28

- 21 わたしは心が騒ぎ/はらわたの裂ける思いがする。
22 わたしは愚かで知識がなく/あなたに対して獣のようにふるまっていた。
23 あなたがわたしの右の手を取ってくださいるので/常にわたしは御もとにとどまることができる。
24 あなたは御計らいに従ってわたしを導き/後には栄光のうちにわたしを取られるであろう。
25 地上であなたを愛していなければ/天で誰がわたしを助けてくれようか。
26 わたしの肉もわたしの心も朽ちるであろうが/神はとこしえにわたしの心の岩/わたしに与えられた分。
27 見よ、あなたを遠ざかる者は滅びる。御もとから迷い去る者をあなたは絶たれる。
28 わたしは、神に近くあることを幸いとし/主なる神に避けどころを置く。わたしは御業をことごとく語り伝えよう。

朗読聖書①エレミヤ書 1. 4-10

◆エレミヤの召命

- 04 主の言葉がわたしに臨んだ。
05 「わたしはあなたを母の胎内に造る前から/あなたを知っていた。母の胎から生まれる前に/わたしはあなたを聖別し/諸国民の預言者として立てた。」
06 わたしは言った。「ああ、わが主なる神よ/わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから。」
07 しかし、主はわたしに言われた。「若者にすぎないと言ってはならない。わたしがあなたを、だれのところへ遣わそうとも、行って/わたしが命じることをすべて語れ。
08 彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて/必ず救い出す」と主は言われた。
09 主は手を伸ばして、わたしの口に触れ/主はわたしに言われた。「見よ、わたしはあなたの口に/わたしの言葉を授ける。
10 見よ、今日、あなたに/諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し/あるいは建て、植えるために。」

朗読聖書②マタイによる福音書 8. 18-22

◆弟子の覚悟

- 18 イエスは、自分を取り囲んでいる群衆を見て、弟子たちに向こう岸に行くように命じられた。
19 そのとき、ある律法学者が近づいて、「先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります」と言った。
20 イエスは言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣がある。だが、人の子には枕する所もない。」
8:21 ほかに、弟子の一人がイエスに、「主よ、まず、父を葬りに行かせてください」と言った。
22 イエスは言われた。「わたしに従いなさい。死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。」

聖なる主なる神さま、聖名を崇め賛美致します。

9月最後の主日、今日もあなたは、こうして私たち一人ひとりに新しい命を与え、この礼拝堂へ、あるいは、配信の場へと導いてくださったこと、心から感謝致します。

三か月近くに亘るこの夏の、本当に厳しい暑さを乗り越え、秋の爽やかな風を感じられるようになったのも、神さまが、夫々の健康を支えて下さったからであると信じます。9月に入り、諸集集も再開し、先週は団体例会を開催することができました。御言葉について、共に分かち合う機会を得て、改めて御言葉の重さを感じました。また今日は、私たちの信仰によって大切な教会の建物の大掃除を、この礼拝の後に予定しております。建物も、私たちの心と同じように、掃除をしなければ、埃が積もり、折角あなたによって与えられた御言葉も、賜物も、生かすことができなくなってしまいます。夫々が与えられているタラントに応じて、この場所を綺麗にし、そこからまた次の主日に向けて、あるいは日々の活動に向けて、この場所を整えていきたいと願います。神さま、どうかその時を事故なく終わられるようお守りください。

しかしながら、礼拝や諸集集を覚えて祈りを合わせていても、夫々の事情によって、思い適わない方々が多くいらっしゃいます。お歳を召している方、病のため、あるいは主日の今日も、この世の仕事のために、配信での礼拝に与ることも難しい方がいらっしゃいます。どうか、そのような方々にも、ここにいる私たちと同じ、神さまからの豊かな恵みを与えられますように、と祈ります。

本日は、佃雅之牧師が御言葉の取次ぎにあたってくださいます。講壇で説教する佃牧師の上に、あなたが聖霊を豊かにお注ぎください。時間をかけて、今日の礼拝のために備えてきた佃牧師の、その御言葉の説き明かしを、あなたが豊かに祝福してください。そして、また、聞く私たちの頑なな心を開き、語られる御言葉を素直に受け入れることができる器としてください。

日本では国を導く者を選ぶための動きが起きています。どうか、この国が、正しい方向に導かれるように、必要な知恵と力とを、国を導く者にお与えください。また、世界に目を向ければ、あちこちで戦禍に逃げ惑い、死と隣り合わせの恐怖に恐れを抱く人々がいます。どうか、あなたが造ってくださった地上に、豊かな平和が一日も早く訪れますようにと願います。

本日、すべての教会でもたれます礼拝の上に、あなたからの豊かな祝福がありますように。

この感謝と願いの祈り、私たちの造り主、イエス・キリストの聖名を通して御前に献げを致します。アーメン。

讃美歌 443:「冠も天の座も」

説教 「主の招きに従う」

佃 雅之

朗読されました『マタイによる福音書』の一つの特色は、キリスト者の行き方を明確に教えていることにあります。今日の箇所も、『弟子の覚悟』と小見出しが付いている通り、「弟子の生き方」について語られているところです。

『キリストの弟子』とは「どのような人のことか」と言えば、「キリストについて行く人のこと」であります。信仰生活において大切なことは、「常に私たちの目に

キリストの背中が見えていること”です。キリストの背中を見失ってしまったら、弟子として歩んでいることにはなりません。

福音書記者マタイは、キリストが説教と癒しの業を通して、その力を示された後、その中から、“弟子になりたい”と願う者が現れた事を伝えています。この時キリストは、大勢の群衆に取り囲まれておられました。しかしキリストは、説教を語ることもせず、癒しの業も行わず、“向こう岸に行くように”命じられました。どうしてキリストは、癒しを求めて集まってきた人々を見捨てるかのように、その場を後にされることを選ばれたのでしょうか。

この個所に書かれています「イエスは、自分を取り囲んでいる群衆を見て、弟子たちに向こう岸に行くように命じられた。」という言葉には注意が必要です。実は原文には、「弟子たちに」という言葉はありません。ですから、ここでキリストは弟子たちだけでなく、その場にいた群衆全体に向かって、「向こう岸に行くように命じられた」と読むこともできるのです。キリストを取り囲んでいる弟子たちと群衆は、この時はまだ、キリストが告げ知らされた『天国』、『神のご支配』の意味を理解してはいませんでした。ただ“自分の病気や苦しみから解放されたいという願いだけを求めていた”のです。そのためにキリストは、「向こう岸に行くように命じて、本当に自分に付いて来る者が誰なのかを見極めよう」とされたのではないかと思います。

「行く」という言葉(アペルコマイ(ἀπερχομαι))には、「その人の後を追う」、「リーダーに従う」という意味が含まれています。ですから、「向こう岸に行くように」という言葉は、今日の箇所最後にある、「わたしに従いなさい。」と同じ意味を持っています。

すると、「そのとき、ある律法学者が近づいて、『先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従って参ります(アコルセオ(ἀκολουθεω))。』と書かれています。「律法学者」とは、聖書に通じ模範的な宗教者として周囲から尊敬されていた存在です。おそらく彼は、キリストが山上から語られた説教を聞き、病を癒された奇蹟の業の目撃者であったのでしょうか。そして、“この人こそは、”と決意をした、“この人こそ旧約聖書に記されたメシアに違いない”と感じ取ったのではないのでしょうか。

ところがキリストは、“弟子になりたい”と申し出た「律法学者」に対して、“よろしい、私についてきなさい”とは言われませんでした。彼に対するキリストのお言葉は、「狐には穴があり、空の鳥には巢がある。だが、人の子には枕する(クリノー(κλίνω))所もない。」この言葉だけです。狐にも鳥にも帰る所があります。それは、すべて、造り主なる神が命を与え、“生きよ!”と祝福されたものであるからです。しかしキリストには、「枕する所もない」のです。キリストは、この地上においては旅人であり、休みなき労働者であります。けれども、「枕する所もない」というのは、“野宿ばかりで住まいがない”ということ以上に、“寄りかかる所、身を傾ける所すらない”とはいふ意味の言葉が使われています。

キリストは弟子志願者に対して、“そのようなわたしに、あなたは本当に従うことができるのか?”と問うのであります。“キリストに従う”ということは、“この地上に、枕する所もない者になる”という覚悟を持つことです。その厳しさを前にして、それでも、“主よ、あなたについて行きます、弟子になります。”と言える人がいるのでしょうか。

私たちは信仰生活の主に従う生活であることを知っています。信仰生活

を貫くためには、自分自身の決断が必要になります。洗礼の時も、教会での奉仕も、礼拝に集まることも、私たちの決心や意志が必要です。けれども、私たちの決心や努力、知識や経験だけで、信仰を最後まで貫き通せるでしょうか。悩みや苦しみの体験が人を神に向かわせるということはあるでしょう。聖書を読んで理解が深まることもあります。しかしそれだけで、生きる信仰を保ち続けることはできません。神さまを信じて生きる歩み、キリストに従う生活が支えられ、力となり、希望となっていくのは、私たちの決心や決意だけではどうにもならないのです。

信仰とは、私たちが生きておられる主と繋がり、その命を戴いて、主のものとして生きることを日々の生活の中で常に実感することです。私たちの思いや力だけでは信仰は成り立ちません。大事なのは、私がどうか、ではなく、主がどう働かれるからです。『主の招き』、呼びかけがあるから、私たちは従って行くことができるのです。もっとはっきり言えば、キリストが命をかけて与えてくださった罪の赦しをしなければ、私たちは主に近づくことさえできません。キリストの十字架による赦しによって、在りのままの私が主のものとしてされ、贖われたのであります。その恵みがなければ、私たちの信仰は、生き方や考え方を少し見直した程度に過ぎません。神の赦しと恵みがあるからこそ、私たちは新しく造られ、新しい命に生きる者とされるのです。私たちが主に従うことができるのは『主の招き』があったからであります。キリストの弟子になるためには、まず、罪人である私たちを赦して招いてくださった主の恵みを知ることです。

今日は、旧約聖書から、預言者エレミヤの召命の記事が読まれました。『主の言葉がわたしに臨んだ』、エレミヤが主に捕らえられた瞬間です。神は或る時、或る人を選び、その人の生涯に介入されます。その瞬間から、神に捕らえられた人は自分の人生に新しい意味を発見することになります。エレミヤもここで、“自分が何者なのか、自分の人生の真の目的は何なのか”を、神と出会い、捕らえられた瞬間に発見することになります。神がその人を預言者にするのは、家柄でもこの世の地位や権力でもありません。また、その人が、“変わりたい、立派になりたい、新しい生き甲斐が欲しい”と思っているからでも、今苦難の中にある、危機的状況にあるからでもありません。神が招くのは、弱さや欠点を抱えながらも、“主に従いたい”と応答した人たちなのです。彼らに共通していたことはたった一つ、“主の招きを受けた”、ということです。そして彼らは、御声に聞き従い、その神の招きの言葉を信じたのです。

旧約の預言者たちは神との出会いを色々な方法で書き記しています。エレミヤが預言者として立てられた時、彼は 20 歳前後であったと言われていますが、ここで神は、「わたしはあなたを母の胎内に造る前から/あなたを知っていた」とまで言われています。エレミヤは神が示された預言者の責任に対して、“自分は不十分で、不適格である”と、神に抗議をしています。私の知る限り、旧約聖書の中で、喜んでその責任を引き受けた預言者は見当たりません。誰もが、初めは、“その責任から逃れたい”と言うのです。拒む者に対して、神が取られる行為は、更なる接近です。ここでも「主は手を伸ばして、エレミヤの口に触れ」、預言者として立つていくための保障を与えられています。預言者として立つ、あるいは、キリストの弟子になるということは、私たちの側の決心や覚悟ではなく、私たちを選んでくださった主の力であるということです。

けれども、神に招かれ、主に触れられた者であるからと言って、信仰に

生きることは簡単で楽なことではないようです。キリストの弟子となったために、却って“信仰生活の厳しさを知る”ということが起こります。「弟子の一人が、「『主よ、まず、父を葬りに行かせてください』と言った。」とあります。当時のユダヤ教社会において、親の葬りは“極めて重大な義務”と考えられていました。“最も大きな愛の業”とも考えられていたのです。この弟子は、キリストが、“行ってきなさい。帰って葬儀をしきなさい。”と言ってくださるだろうという思いがあったのだと思います。ところが、キリストは、「わたしに従いなさい。死んでいる者たちに、自分たちの死者を葬らせなさい。」と、言われたのです。

この言葉は、父を葬ることが、“不必要でどうでもいいことだ”と言っているわけではありません。要するに、“父親の葬儀を出すことよりも、わたしと一緒に、向こう岸に行くことの方が大事だ、わたしに従うことのほうが大切だ”と、言われたのです。

親の葬儀を出すというのは、現代でも大事な子供の務めです。人間的な思いからすれば、“先ずはきちんと葬儀を行ってから、主に従えば良いのではないか”と考えるでしょう。“子供としての務めを果たし、様々な感情や心の整理をある程度つけてから、改めて決意を持って歩み出す”、それが、自然な流れのように思えます。しかし、キリストは、「わたしに従いなさい」と語られました。

実際の生活の中では、課題や責任は順序良く一つずつ迫ってくるということはありません。あれもこれもいっぺんに、しかも、今すぐ果さなければならぬ課題として突きつけられるものです。しかし私たちは、一度に、あれもこれも成し遂げることはできません。“キリストの弟子となって生きる者は、日々の生活の中で何を優先するのかという問いに、何時も向き合わなければならない”ということです。ここで、キリストがおっしゃることは、“死者の言葉は死者に任せなさい”ということです。つまり、亡くなった方のことを、まして、死の後のことは、生きている者の手に負えることではないのです。

教会も葬儀行います。キリスト教の葬儀というのは、亡くなった方のためだけに行うものではありません。むしろ、ご遺族や出席される方々が、神の慰めに触れ、信仰の確信を新たにするためにあるのです。亡くなった方の霊は、既に『命の主である神』の下にあります。ですから私たちは、亡くなった方のことを、すべて主にお委ねするのです。そして、神さまが、この地上での歩みのために与えてくださった体を、感謝の心を以て葬り、土にお返しします。聖書にあるように、「塵は元の大地に帰り、霊は命の与え主なる神の元に帰る」(コヘ12:7)のです。ですから、生きている私たちが、主と共にいることは、死者の最も近くに居ることになるのです。そのためにキリストは、「わたしに従いなさい」と招いてくださいます。愛する人の死を悲しんでいるあなたに、“今こそ、わたしと共に居なさいなさい”と呼掛けてくださるのであります。

今日は説教のはじめに、“弟子とはキリストについて行く者のことです”と、お話をしました。“キリストについて行く”、その先にあるものは何でしょうか。

今日の箇所、キリストは、ご自分のことを、「人の子」と言われています。「人の子」とはどのような意味であるでしょう。聖書には、このように書かれています、「人の子は、人々の手に引き渡されようとしている。そして殺されるが、三日目に復活する。(マタ17:22-23)」、「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである。(マコ10:45)」。どちらも、十字架に関わるものです。「人の子」と言う言葉には、“私たちを救うために、ご自分を与えになる”という意味が示されているのです。キリストは、私たちの罪を贖い、私たちを真の弟子とするために、十字架へと向かわれました。

十字架に向かわれるキリストの背中を追い、共に歩いていくことが弟子の道です。その意味を知った上で、“どこまでもあなたについて行きます”と、言うことができたとき、私たちは、“主の弟子として日々を生きている”と言えると思います。

今日も、私たちにキリストは、「わたしに従いなさい」と呼掛けてくださっています。主キリストは、“付いてきなさい”と招くだけでなく、付いていく者を守り導いてくださいます。「枕する所もない」キリストこそ、私たちに真の安らぎの場所を与えてくださるお方なのです。キリストに従い、キリストの背中を見詰めつつ、また私たちが歩んで参りたいと思います。

お祈り致します。

聖なる神、聖霊によって、今日も私たちに語りかけ、あなたが触れてくださった恵みを感謝します。どうかこの新しい一週間も、私たちが聖霊に導かれて、主に従うことができますように、御言葉を土台として、私たちが与えられた課題に取り組み、責任を果たすことができますよう導いてください。この世の困難に立ち向かう勇気を与えてください。あなたの愛に支えられて、キリストの弟子として、終わりの日まで歩むことができますように。主の聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:510「主よ、終わりまで」

献金・感謝(横山知枝)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

父なる神さま、主にある兄弟姉妹と共に、教会で、またライブ配信を通して礼拝を献げることが赦されましたことを感謝いたします。佃先生の説教を通して、豊かに御言葉を与えてくださり感謝致します。私たちがこの一週間を、夫々の旅路の中で、御言葉を糧として歩むことができますようにお導きください。私たちは必要な物を与えられ、主の僕として生きることが赦されていることを感謝いたします。今、夫々が与えられた物の中から感謝と献身の徴を御前に献げます。どうぞ祝して、教会の御用のために用いてください。主が教えてくださった『主の祈り』を共に祈り、新しい日々を迎えさせてください。「主の祈り」…アーメン。

讃美歌:90「主よ、来たり、祝したまえ」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。アーメン。

報告:(1)大掃除注意、(2)週報記載「北支区連合祈禱会」リマインド。

後奏:「み神より離れまつらじ」(0. ブクステフーデ)